

外 国 語

1 外国語科の学習指導の改善

(1) 改善の視点

新しい学習指導要領における、外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること」、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること」、「外国語を通じて、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養うこと」の三つの要素から成り立っており、外国語による実践的コミュニケーション能力の育成にかかわる指導が一層重視されている。

このような「実践的コミュニケーション能力」の育成を図るためには、次のようなことが必要となる。

- ① 情報や考えを伝え合うことを活動の中心とすること。
- ② 生徒が情報や考えの受け手や送り手となること。
- ③ 具体的な言語の使用場面を設定すること。

「実践的コミュニケーション能力」は異文化理解や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度などと有機的な関連をもっている。コミュニケーションを実際に行うには、「言語や文化に対する理解」や、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が深くかかわっており、これらの理解の深まりや態度の向上によって、実践的コミュニケーション能力が一層効果的に発揮できるようになる。

同時に、実践的コミュニケーション能力の向上を通して、「言語や文化に対する理解」が深まり、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が一層向上することが期待できる。この意味で、「実践的コミュニケーション能力」が外国語科の目標の中核をなしている。

また、効果的な学習指導を行うためには、指導目標や評価の観点をあらかじめ明確にして、学習内容のまとまりごとの評価規準を設定した上で、指導計画を作成することが大切である。

(2) 効果的な学習指導

(1)の「実践的コミュニケーション能力」の育成に当たっては、次のような指導方法を授業の中に組み入れるよう工夫する必要がある。

なお、そのような活動を行う際には、言語の使用場面や働きを有機的に組み合わせることにより、活動を実践的なものとするのが重要である。さらに、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことはそれぞれ独立して用いられる場面もあるが、現実のコミュニケーションでは、複合的に行われることが多いので、一つの領域に重点を置いて学習する場合でも、他の領域と関連付けて総合的・有機的な活動を行うことで、学習を実践的で効果的なものとするのが大切である。

ア ティーム・ティーチング……複数の日本人教師によるものと、ALT、地域に住む外国人、海外からの訪問者や留学生、外国生活の経験者などによるものがある。

- イ ペア・ワーク……スキット、ロール・プレイ、インタビュー、即興劇など
- ウ グループ・ワーク……スピーチ、プレゼンテーション、ロール・プレイ、即興劇、ディスカッション、ディベートなど
- エ 視聴覚教材の活用……録音テープ、ラジオ及びテレビのニュース番組、ビデオ、映画など
- オ LLの活用
- カ コンピュータの活用……個別学習ソフト、辞書ソフトなど
- キ 情報通信ネットワークの活用……電子メール、ホームページ作成、インターネットからの情報検索など

2 評価の工夫

(1) 評価の基本的な考え方

学力については、知識の量でのみとらえるのではなく、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかによってとらえる必要がある。これからの生徒の学習状況の評価に当たっては、このことを適切に評価できるよう、工夫する必要がある。

また、現行の評価方法を発展させ、目標に準拠した評価を一層重視することが大切である。

さらに、教育活動は、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら展開されるものであり、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。

(2) 評価の工夫

外国語科の目標の三つの要素と四つの評価の観点、及び4領域との関係は、次のように整理することができる。

評価の観点 領域	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
	コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	外国語を用いて、情報や考えなど伝えたいことを話したり、書いて表現する。	外国語を聞いたり、読んだりして、情報や話し手や書き手の意向など相手が伝えようとすることを理解する。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けるとともにその背景にある文化などを理解している。
読む	○	○	○	○
書く	○	○		○
聞く	○		○	○
話す	○	○		○

(注：実践的コミュニケーション能力は、「表現の能力」と「理解の能力」の2つに分割されている。)

これらのことを考慮しながら、年間指導計画や単元ごとの指導計画、さらには、1単位時間の指導計画を作成する際には、適切に評価規準を設定することが大切である。

(3) 評価方法

評価を行う場面としては、学習後だけではなく、学習の前や学習の過程における評価を工夫することが大切である。また、評価の時期としては、学期末や学年末などだけでなく、目的に応じて、単元ごと、時間ごとなどにおける評価を工夫する必要がある。

具体的な評価方法としては、ペーパーテストのほか、観察、面接、ワークシート、発表などを用い、その選択や組合せを工夫して行う。

なお、ペーパーテストについては、「知識・理解」のみを問うのではなく、形式の工夫によって、「理解の能力」や「表現の能力」を含め、生徒の資質や能力を多面的に把握できるようにすることが大切である。

次の例は、上記の具体的な評価方法を学期全体であらかじめ計画したものである。

K高等学校の例

	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
定期テストA		20	30	50
定期テストB		20	30	50
観 察	20(10×2)			
面 接	20(10×2)	20(10×2)	20(10×2)	20(10×2)
ワークシート	20(10×2)		30(15×2)	
発 表	20(10×2)	30(15×2)		

(定期テストAとBでは、「知識・理解」を問う問題を50点分、「表現の能力」と「理解の能力」を問う問題をそれぞれ20点と30点分出題している。また、観察、面接、ワークシート、発表は、評価対象の観点ごとに2回ずつ課し、それぞれに各10点ないし15点ずつ配当している。)

(4) 評価の工夫改善に当たっての留意事項

新学習指導要領においては、生徒がゆとりのある教育活動の中で、基礎・基本を確実に習得できるようにすることを特に重視している。目標に準拠した評価を一層重視する理由の一つは、生徒一人一人が基礎・基本を習得し、少なくとも「おおむね満足できる」と判断される状況を実現するための指導を徹底するということである。

したがって、各学校においては、特に、学習指導の過程における評価を重視し、「努力を要する」状況となるおそれのある生徒に対しては、教員から様々な働きかけを行ったり、手だてを講じたりする必要がある。

(5) 学校全体としての評価の取組

評価活動の充実のためには、各学校において日ごろから教員間の共通理解を図ることが大切である。

さらに、各学校において、評価についての考え方を深め、評価規準の改善や評価方法の工夫改善を一層進めたり、その結果を指導に生かしたりするためには、教員一人一人が自己研鑽に努めるとともに、学校全体で校内研究・研修を通じて評価についての力量を高めることが必要である。

また、目標に準拠した評価を行う上では、各学校における評価の根拠が明確で信頼性の高いものにし、保護者や生徒に十分説明できるものであることが重要である。

3 学習指導案の作成

科目「英語 I」の学習指導案（例）

time	activity	students	JTE	ALT
5min	①Morning greeting in English	Greet teachers and answer questions	Greet students and take role	Greet students and ask some questions
8min	② Continue the explanation of the passive voice	Listen to the explanation and take note	Explain the passive voice in English	Prepare for the next activity by taping pieces of paper with words and numbers written on them around the classroom
5min	③Explanation of the game	Listen to the directions and try to understand the English	Help explain if students do not understand	Explain the game in English
15min	④Students get into groups of 6 and go around the room collecting words and writing them down on the appropriate line according to the numbers	Collect words by memorization and transmit them orally to the group they belong to. Change their roles in the middle of the lesson.	Assist if necessary	Assist if necessary
10min	⑤ Students arrange words to make sentences	Make sentences	Assist if necessary	Assist if necessary
5min	⑥Each team reads their sentences	Read sentences	Check sentences	Check sentences
2min	Teachers' comments on students' performances	Listen to the comments	Make comments	Make comments

上記は、科目「英語 I」の「聞くこと」に重点を置いた学習指導案である。

次頁に、この学習指導案の各言語活動（activity）（①、②、③、④、⑤、⑥）を評価する場合の評価規準の例と、その評価方法の例を示す。

本課の評価規準の例

	(1)コミュニケーションへの関心・意欲・態度	(2)表現の能力	(3)理解の能力	(4)言語や文化についての知識・理解
本課の評価規準	<p>ア 教師の英語を聞き言語活動の内容を理解しようとしている。</p> <p>イ 級友の英語を聞き内容を理解しようとしている。</p> <p>ウ 理解できない箇所も推測で聞き続けようとしている。</p> <p>エ グループ・ワークなどにおいて必要に応じて協力し合っている。</p>	<p>ア 文法に従って正しく書くことができる。</p> <p>イ 正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて音読できる。</p>	<p>ア 強勢、イントネーション、区切りなどを聞き分けることができる。</p> <p>イ 聞いた内容について正しく内容を聞き取ることができる。</p> <p>ウ 聞いた内容について大切な部分を聞き取ることができる。</p>	<p>ア 単語の発音の違いなど語句や文を聞き分ける知識を身に付けている。</p> <p>イ 場面や状況に応じた表現を知っている。</p> <p>ウ 文構造についての知識がある。</p>

次の表は、この評価規準の例と、前頁の学習指導案の各言語活動 (activity) (①、②、③、④、⑤、⑥) との関連性及び予想される評価方法の例を示したものである。

活動	本課の評価規準の例との関連性	評価方法の例
①	(1) のア、ウ (3) のア、イ、ウ (4) のア、イ、ウ	観察法
②	(1) のア、ウ (3) のア、イ、ウ (4) のア、ウ	観察法 録画チェック
③	(1) のア、ウ (3) のア、イ、ウ (4) のア、ウ	観察法 録画チェック
④	(1) のイ、ウ、エ (2) のア (3) のア、イ、ウ	観察法 録画チェック
⑤	(1) のエ (2) のア (4) のウ	観察法 録画チェック
⑥	(1) のイ、エ (2) のイ (3) のア、イ、ウ (4) のウ	グループごとの発表に対する自己評価・相互評価

4 質疑応答

問1 外国語科と「総合的な学習の時間」の関連において、どのようなことに留意すればよいか

「総合的な学習の時間」において外国語科と関連の深い学習活動を行う際には、そのねらいと外国語科の目標の相違を的確に踏まえ、指導計画を作成することが大切である。また、外国語で学んだ内容が「総合的な学習の時間」の活動に生かされるとともに「総合的な学習の時間」で身に付けた資質や能力が外国語科の学習に役立つなど、各学校では指導計画の有機的な関連に配慮する必要がある。

次に、関連の深い学習活動の例を示す。

1 外国語科で学んだ内容が「総合的な学習の時間」の活動に生かされる例

国際協力事業団（JICA）を訪問し、外国からの研修生と英語を用いて交流しながら、研修生の母国の文化や伝統を学んでいる。平素から実践的コミュニケーション能力の育成を重視した英語の授業を展開している。

- ・ グループに分かれ世界各国からの研修生と英語で交流し、その内容を英語で記録する。
- ・ 学校に戻り記録を発表形式で整理し、プレゼンテーションの準備をする。
- ・ 発表時には英語による質問を受け、英語で答える。

このことにより、授業で学んだ英語を実際のコミュニケーションの場で生かすことができる。

また、英語によるプレゼンテーションの経験を通して、英語による質疑応答の能力が養われるとともに、人前での発表力の育成が図られる。さらに、交流後も電子メール等での英語によるコミュニケーション活動の継続が図られており、自主的・主体的に英語を学ぶ態度の育成が期待できる。

2 「総合的な学習の時間」で身に付けた資質や能力が外国語の学習に役立つ例

高校所在の自治体の海外研修事業として、英語圏の国の姉妹都市（姉妹校）を訪問し、様々な交流事業を行っている。同校ではこの研修事業が充実したものとなるよう「総合的な学習の時間」において国際理解をテーマにした学習を豊富に取り入れるなど、事前・事後の学習を計画的、組織的に展開している。

- ・ 交流会での発表に向けて、英語での説明を作成する。
- ・ 訪問前に、自分のことを英語で説明する手紙やメールを作成して送る。
- ・ 訪問後に、礼状や旅行のまとめを英語で作成する。

このことにより、生徒のコミュニケーションを図ろうという意欲が高まり、英語学習の大きな動機付けになるとともに「言語や文化に対する理解」が深められ、国際感覚や国際協調の精神の育成が図られている。

また、交流会での発表等も実践的コミュニケーション能力の育成につながっている。

このように、外国語科の指導の在り方等の改善を図るとともに、意図的・計画的に知識や技能を一体化させる機会を設けることで、知識や技能等が総合的に働き、外国語科の目標を達成し、さらに「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえた学習活動を展開することができる。